

カントの統制的原理の使用について

細 谷 章 夫

この小論において、カントの第一批判における統制的原理の概念を明確にすること、それがやや形式的であるがカント哲学全体の基本的な考え方になっていることを少しでも示そうというのがその目的である。ただしカント哲学の全体系をそれと関連づけて論ずることは小論の範囲を越える。せいぜいこの小論で示すことができるのは、そのような見通しのもとに統制的原理の概念が明らかにされているということにつきる。

第一批判において、本来的な意味における統制的原理があらわれるのは^①、アンチノミーの解決の箇所と「超越論的弁証論のための付録」(B 670～696) (以下「付録」と略称する)である。「付録」はその語の意味からみて、アンチノミー解決の統制的原理の補足との意味に受取れる。しかし実際はそうではない。アンチノミーの統制的原理はアンチノミー解決のための統制的原理だけが前面にでていて、その特性に関しては可想的なものに関することをのぞき、簡単な叙述にとどまっている。それに対して「付録」では統制的原理がより総括的な立場から、その特性が述べられている。しかし両者の関連は密接ではなく、アンチノミー解決の統制的原理とはほとんど独立的に述べられている。そのため両者の間の関連が明確でないばかりか、重要な点での食い違いも生じている。小論はとくにこの両者との関連に留意して、第一批判における認識論的な立場からの統制的原理の本質を解明したい。

とはいうものの筆者はすでにいくつかの論文で個々にではあるが、統制的原理に関して述べている^②。それらの結果を多くは踏まえているので、カントの原文の引用、解釈などはほとんど省略した。また叙述も単純化し、厳密な用語法は少々犠牲にされた。詳しくはそちらを参照していただきたい。典拠も第一批判の第二版で示す。

§1 種々の統制的原理

カントが具体的にどのようなものを統制的原理と考えていたのか、そしてそのア・プリオリであるとの論拠、およびそのア・プリオリの性格を述べるのがこの節の目的である。

周知のように、カントの説明によると、机や椅子など感覚的对象を認識へともたらすのは感性の働きである。そしてその感覚的認識をふまえ、一般に経験的認識が成りたつ。そのとき働く能力が悟性であるという。ただカントが経験論者と異なるのは、よく知られているように、感性や悟性の働きのうちに、あるいは感覚的認識や経験的認識のうちに、ア・プリオリなものを認めたことであった。前者のア・プリオリなものによって、たとえば幾何学の諸公理のもつ真理性を証明しようとした(カントがすべて述べているように、幾何学はなにも哲学によってその真理性を保証してもらおうとは思っていない(B 120))。このことによってカントがなしたのは、ア・プリオ

りなものを認めることによってよりよく幾何学の本質を説明しようと考えたこと、うまく説明できたということにより逆にア・プリオリなものを認めることの正しさを主張したにすぎない。つまりア・プリオリなものの主張の根拠として、幾何学の真理性の説明がなされたのである) し、後者のア・プリオリなものによって自然科学の基本的な考え方、たとえば因果律を説明しようとした。因果律に関していえば、これが単なる経験からはでてこないこと、かといってそれをただの論理的なものとも考えられず、いわんや習慣といったもので原因と結果を結びつけることはできなかった。というのはカントが単に経験からでてこないというのは、その因果律がもっと強力な仕方で、つまり一般性と必然性をもつ仕方で、経験的認識の中に入り込んでいるとみたからである。その一般性と必然性をもつ因果律の概念そのものはけして経験によっては説明できないとみたのである。因果律が必然性をもつかぎり、客観そのもののあり方に深くかかわりをもち、単なる論理的なものとはいえず、一般性をもち、より客観にかかわりをもつ以上、それは単に経験的なものというわけにはいかないのである。ところがカントはさらにも一つの能力、理性を考える。認識論的にこの能力は種々の経験的認識をふまえて、体系的統一へともたらすのである。そしてこの理性の能力にもある種のア・プリオリ性を考える。しかしそのア・プリオリ性は、悟性や感性において考えたア・プリオリなものとは違ったア・プリオリ性であり、それは悟性などのもつ構成的原理のア・プリオリ性に対して、統制的原理のもつア・プリオリ性であるといっていだらう。では統制的原理のもつア・プリオリ性とはどのようなものであろうか。その前にも少し予備的説明をしておこう。

第一批判ではアンチノミーの解決として統制的原理があらわれてくるが、「付録」ではいわば体系的統一のために働く理性の原理として統制的原理が述べられている。そしてそこでは要約すれば二つの点から統制的原理がすぐ身近かに看取されることをカントは指摘する。その二つの点とはカントの時代における自然科学のやり方のうちにみられ、またも一つは哲学者の考え方に中にひそんでいるという。

カントの叙述はハイムゼートも指摘する^③ように、その時代の自然科学観に基づいた説明で、不明な部分もあるが、その主旨は十分に理解できる。カントの主張はこうである。体系的統一のために「ある理念」が導入されているということである。そしてこの理念は二つの働きをする。まず第一に、この理念は特定の認識に先行して設定されること。第二に、そのことによってある特定の認識がその理念との関連によって、その位置をア・プリオリに決定することができること、である。具体的にカントは純粋な土、純粋な水、純粋な空気をあげる。すなわち「純粋なもの」の理念を設定することにより、現実的な不純なものが、それぞれの度合に応じて統一的に関連づけられるという。そのとき「純粋なもの」は現実には見い出されないが、その理念の設定により現実の不純なものとの関連がア・プリオリに与えられるというわけであろう。カントはこのような理念のあり方を比喩的に、虚焦点 *focus imaginarius* (B 672) とし、この虚焦点としての理念は全く可能的経験の外に横わるものではあるが、それにもかかわらず、悟性認識に、つまり経験的認識に最大の拡大と統一を与えるのに役立つ機能 (B 672) をもつとする。次に述べる「根本

力という理念」も同じ考え方とみてよいだろう。

統一の概念の一つに「力」がある。しかし一見したところ、現象においては種々の現われかたをし、その数だけ諸力を想定したくなる。ちょうど人間の心が感覚、意識、想像、記憶、機知、判別力、快、欲望などのように種々の現われかたをするのと同じである。そして想像と意識、さらに記憶、機知と結びつけられて人間の心に統一されているのと同様に種々の諸力が比較され、かくれた同一性を見い出すことによって、その諸力の数が減らされていく。そのとき「根本力という理念」die Idee einer **Grundkraft** (B677) が機能する。このような理念が現実中存在するかどうかは別として、この理念は種々雑多な諸力に対して体系的統一を思いうかべるとき、少くとも一つの課題になるという。ましてある力と他のある力とが同一なものとして発見されればされるほど、ある同一な力の種々な現われかたにすぎないとなることが、ますます確からしくなってくる。ここにカントは新しい見方をひき込む (B678)。要約すれば、このさい理念の設定が体系的統一のための重要な要因になっていること、それは単に体系的統一という論理的形式的なものではなく、客観自体が事実そうであるということを前提していること、それだからこそ客観的实在性を言い立てることができるというわけである。一般的にいえば、実際に客観がそうになっているかどうかにかかわらず、客観的实在性を言い立てることができるのは、その原理が体系的統一のための単なる規則といったものではなく、ア・プリオリに客観自体がそうであることを前提しているからである。カントはこのような性格を超越論的前提 (B679) を名づける。統制的原理は超越論的論理を前提している原理であるというのがカントのこの原理に対する基本的な特色づけなのである。

このような性格をもつ原理が哲学者の考えの中にもまた入りこんでいる。それは端的には類と種の関係のうちに見られる。個物が種々雑多だからといって種の同一性を排除するものではないこと、逆に多様な種はわずかな類の規定としてとりあつかわれる。さらにこの類がいつそう高次の属の規定としてとりあつかわれる。これらをふまえ、すべて経験的概念からある種の体系的統一が求められるというのは、客観自体がそうであることをあらかじめ前提している超越論的論理によるからである。それは次のような原理にも見られる。「諸始源 (あるいは諸原理) を必要もないのにふやしてはならない」(B681)。外見上自然そのものが無限の相違を見せているが、その相違があるからといって、統一を推測することを妨げるものではない。例えば化学者がすべての塩を酸とアルカリに環元させ、さらに同一の根本素材から考えようとしている。かといってこれは思考経済といったものではない。なぜならこの理性統一が自然そのものに適合していることを誰れもが前提しているし、だからこそこの原理はそのように命令しているのだという。

この原理に対して同様に「諸存在者の多様性を理由なくして減らしてはならない」(B684) があげられる。これは類から種、さらに下位の種へと分割していくことを押しすすめるものである。このことはむろん現実には諸物に関し、無限に差異があらわれることを意味するものではないが、諸現象の認識が不断に種別化を要求しつづけることを意味する。この二つの原理をカントは理性の二つの関心であるとし、前者を「諸類に関する外延 (一般性) の関心」と呼び、後者を「諸種

の多様性に関する内包（規定性）の関心」と呼んでいる（B 682）。そしてこの二つの原理に「諸形式間には空虚はない」を付け加える。これは「外延の関心」が種から類，類から属へと統一の方向へ進み，「内包の関心」が逆に属から類，類から種，種からさらに下位の種へと進むのに対して，あらゆる可能的な諸概念の全領域のうちに，なんら空虚なものは存在しないこと，かつこの領域の外になにも見い出されないことを意味する。要するに「外延の関心」と「内包の関心」の視点のうちに連続的な結びつきがあることを表明している。従ってこの原理から直接に「形式間には連続がある」（B 687）が導き出されるのである。

カントはこの三つの原理を経験的使用に合せて順序をかせ，それぞれに理念を対応させる。つまりそれら原理は帰するところ経験がけして及ぶことのない原理としての理念を含んでいるというわけである。順序を経験的使用にあわせて置き換えたその理念とは，多様性 *Mannigfaltigkeit*，類似性 *Verwandschaft*，統一性 *Einheit*（B 690）である。そしてカントはこれら古い哲学者の原理を新しく次のような原理に対応させる。それらは特殊化の原理，同質性の原理，連続性の原理である。カントはこれら原理が単に形式的で，無味乾燥なものでないことを示すために，上記の原理を手引きとして慧星の軌道が求められることを示す。諸惑星の軌道に関して，とりわけ慧星の軌道がどのようにしてこれら諸原理の適用からでてくるかを示すのである。

これは思考実験的なもので，要約すると次のようになる。第一に諸惑星を粗雑な経験によって円形としてとらえようとする。諸惑星の軌道に差異が見い出され，円形に近似した諸惑星の運動，すなわち楕円に到達する。ところがさらに慧星がその軌道において大きな差異を示す〔この差異を見い出すこの操作は「特殊化の原理」の適用と考えられる〕。慧星の軌道は円形をなしてもとへ戻らないからである。そこで私たちはその軌道にある一つの放物線軌道と判断する。この放物線軌道は楕円に近似していて，楕円の長軸が非常に広くひろげられていたら，私たちの観測では楕円と区別されない。そこで私たちは諸原理の手引きにより，軌道の形に関して諸軌道の類による統一に到達する〔「同質性の原理」の適用〕。諸軌道を類によって統一するため，軌道運動の法則の原因として引力を考え，それによって軌道を統一的に，しかも連続的に考えようとする〔ここで全体としての統一原理である「連続性の原理」が働いているとみられる〕。すなわち種々の軌道運動はみかけ上の差異であって，軌道運動が引力と原因とする限り，ある軌道の規則の変様ととらえられている。カントによれば，ここにかつて経験が保証できなかったことがつけ加えられているとし，原理によって超越論的前提がなされていることを暗に示す。結論は種々の軌道運動を親近関係によって考えようとし，その同質性の原理それ自身の規則に従って，慧星の軌道を双曲線によって考えようとする導き出されるというのである。

以上種々の統制的原理を述べてきたが，私たちは次の四つの原理にまとめあげることができようである。類と種の間を基礎とし，さらにその連続性を付与して仕上げられた三つの統制的原理（特殊化の原理，同質性の原理，そして連続性の原理），及び最初に述べた虚焦点としての理念（例えば「純粋なもの」，「根本的なもの」を設定する）による原理である。後者はまだ原理として命題の形で示されているわけではなく，カントによってある命名がなされているわけではない。

しかしのちの議論のために、私たちは「虚焦点の原理」と名づけておこう。以上四つが「付録」でカントが考えていた統制的原理と解していいだろう。そしてこれら諸原理はア・プリオリな仕方で使用されること、すなわちそれら諸原理が超越論的前提を含んでいるという共通の特色を示しておいた。それでは第一批判で具体的に、アンチノミーの解決として使用された統制的原理とはどのようなものであったのか。

§2 アンチノミー解決における統制的原理

周知のようにアンチノミーとは相反する認識が存在することによって、矛盾が生ずることである。カントは相反する認識をそれぞれ定立、反定立とし、世界に関するある種の認識にアンチノミーが存在すること、しかも四種類のアンチノミーが存在することを示した。簡単にいえば、第一アンチノミーの定立は世界が時間において始まりをもち、空間において限界をもつ、ということ。反定立は世界が始まりをもたず、空間的限界をもたないということ、つまり時空的に無限であるとの認識である。第二アンチノミーの定立はこの世の物体（合成的実体）は単純なものから成り立っている、である。一般的に言えば、存在するものは単純なものか、単純なものから成る合成体のいずれかであるということ。反定立は逆に、世界において物体は単純な部分より成り立っていない。一般的には、世界には単純なものは存在しない、である。

第一、第二アンチノミーでカントの示した形式的な解決の仕方は次のとおりである。この二つのアンチノミーの定立と反定立はそれぞれ矛盾対当の関係にあるのではなく、弁証論的対立ではないということ、つまり外観上相互に対立する定立、反定立との間に第三の命題が存在する。第一アンチノミーにあてはめれば、その定立と反定立は「世界は時間的空間的に有限か無限かである」との命題で表わされ、第三命題「世界は有限でも無限でもない」が入り込む余地があるということになる。同様に第二アンチノミーの定立・反定立に対して、第三命題「合成体は単純なものから成り立っているのでもなく、単純なもので成り立っていないともいえない」が入り込むというわけである。その意味では第一、第二アンチノミーの定立、反定立のいずれも偽なる命題なのである。ではそれら定立、反定立を偽とする論拠はなんであるのか。さらにカントの形式的な解決の仕方を示そう。

アンチノミーはもともとカントの哲学体系において諸カテゴリーから、それも系列を形成するカテゴリーより導き出されている。だから第一アンチノミーの場合には、時空的にある部分（例えば「ここ」と「今」でもよい）を基点として加算的な系列を形成すれば、その系列によって世界という全体が尽くされるかどうかの問題となってくる。つまり世界全体は時空的に系列がどこまで進むかという系列の全体によって示される。第二アンチノミーは基本的に分割問題なのである。ある与えられた全体としての物体が単純なものに分割されることによって生ずる分割と分割されたものの系列が問題になっているからである。分割されたものが単純なものを複合として含めば、さらに分割される。分割はそれ以上に単純なものがなくなるまで継続される。従って第二アンチノミーにおける分割と分割されたものの系列はその分割がどこまで遂行し尽されるかにあ

り、それはまた分割の系列の全体によって示される。この系列に関して次のような形式的な解決が関わってくる。上記のように弁証論的対立に基づいているアンチノミーは、また系列と全体に関して一つの誤った理性推理がなされているというのが、カントの主張なのである。その誤った理性推理とはこう示される。

- (1) 条件づけられたものが与えられているなら、そのあらゆる条件の全系列も与えられている。
- (2) ところで諸対象は私たちに条件づけられたものとして与えられている。
- (3) だから、あらゆる条件の全系列は与えられている。

ここで問題なのは(1)の大前提なのである。条件づけられたものが与えられているならば、そのあらゆる条件の全系列が与えられているとはいえないというのである。このあらゆる条件の全系列は理念であって、要請はされてもけして到達されないものなのである。いいかえれば、論理的要請としての系列は背進（第一アンチノミーの場合には、ある与えられた部分から加算的系列をなすように拡大の方向に進むことであり、第二アンチノミーの場合には、与えられた合成体が分割され、その分割からさらに分割へと細分化の方向に進むこと）を継続するように要求されているだけであること、けしてあらゆる条件の全系列が現実にと与えられているわけではないのである。

第一、第二アンチノミーの実質的な解決を示そう。系列の背進において「無限への背進」か「不定への背進」かが重要なポイントになる。要約していえば、無限への背進によって無限の系列が与えられるが、それはどの量よりも大きい「無限」という一つの規定的な量を表わしている。それに対して不定への背進は背進しただけの系列が与えられているだけで、背進の系列は完結したものとして、規定的には与えられていない。従って無限への背進と不定への背進との差異は、系列による全体量が規定的にと与えられているかどうかにある。それではその背進の差が第一アンチノミーの系列と第二アンチノミーの系列と結びつくとき、どのような効果がでてくるのであろうか。やや結論を先取りすれば、いずれの系列においても実際は、不定への背進がおこなわれるのであって、けして無限への背進ではないということなのである。ではこの概念を第一、第二アンチノミーの場合の系列に適用したらどうなるのであろうか。

もともとひとは「世界全体」の量の概念をどこから手に入れるのか。カントによると私たちは世界全体をつねに概念においてもっているものであって、(全体として)けして直観のうちにもっているのではない(B546/547)のである。つまり世界全体の概念は経験的背進を出発点として得られる。まず直観的に世界のある部分(「いま」と「ここ」を出発点として)から加算的に拡大していく背進によって、その背進をつぎつぎに継続することによって得られるのである。そのときその背進は不定への背進であって、無限への背進ではない。従って世界全体の概念は規定されない(不定の)全体量を意味するのである。無限への背進が問題なのは、まだ到達していない世界量を規定的に先取りしているところにある。本来世界全体の量は背進に先立って規定されるものではなく、あくまで背進によって得られるものだからである。すなわち不定の背進が世界全体の概念をつくりあげるものであって、世界全体という規定的概念が背進を行わせるのではない。そしてこの背進が不定であることは世界全体の量が不定であることを意味し、それは世界が有限と

も無限ともすることができないとの結論へ導いていくのである。結論を要約すれば、世界をなにか統一ある「一つの全体」と規定的に考えることがそもそも誤りだというわけである。

第二アンチノミーの分割の系列ではどうなるか。分割においては分割される全体量は与えられている。しかしその分割の系列（分割したものをさらに分割、それをさらに分割していく系列）においては、その分割の全系列は与えられていないとする。つまりここでは分割の系列全体が無限か、不定かが問題になる。分割の系列とはもっと端的に言えば分割の数でもいいし、分割された諸部分の数（分割の数＋１）といってもいい。私たちは分割を継続的に遂行すれば、合成体の全体は無限に多くの諸部分から成り立っているといいたい。カントはそれがいえないのだと主張する（B 552）。分割の系列である全分割は背進が行われることによって諸部分が現実的なものとして与えられること、この背進が継続的にどこまで行なおうとも、すべての諸部分が無限の諸部分から成り立っているということとは別であるというのがその理由である。だからこの分割においてその分割をどこで中止するかは全く不定である。たとえ無限分割が考えられるとしても、現実にはその部分をさらに分割することが可能であるということの意味するにすぎない。ここに再び第一アンチノミーの解決と同様に全分割に関しては不定への背進が生ずるわけである。要約すれば第一アンチノミーの場合には系列全体の量が不定であったのに対して、第二アンチノミーの分割においては分割の対象である全体量は経験的に規定されているが、分割の系列（たとえば諸部分の数）は不定ということになる。従って分割は現実的に不定の全分割を含むのであるから、分割の全系列が無限の集合として、ある実体が無限の諸部分から成り立っているとはいえないのである。結論をいえば、合成された実体の諸部分が不定の分割に基づくかぎり、その実体は単純なものから成り立っているともいえないし、また規定的な無限の諸部分から成り立っているともいえないわけである。

第三、第四アンチノミーの解決は全く第一、第二アンチノミーの解決とは異なる。第四は第三アンチノミーの解決とは基本的には同じなので、第三アンチノミーを中心に述べていく。ここでも系列が解決の鍵になる。形式的に言えば、この系列の外に可想的な intelligibel ものを想定することによって解決する。

第三アンチノミーの定立は自然の法則の従う原因性以外に、諸現象の説明のために自由による原因性を想定する必要がある、ということ。反定立は、自由なものはなく、世界においてすべてのものは自然の法則によって生起する、である。ここでの系列は原因性の系列である。ある結果が与えられれば、その原因、さらにその原因の原因とさかのぼる系列である。ここでも不定への背進が考えられるならば第一、第二アンチノミーの解決と同じになる。ところがその系列を完結させる、いわば第一原因（それ以上の原因がない原因）を想定することにより解決をはかる。そのようなものは経験の領域に存在しないとの意味で、それは全く可想的な原因なのである。このような原因をカントは「ある状態を自分自身から始める能力」（B 561）と特色づける。しかし一体どうしてこのような原因を想定することが許されるのだろうか。要約すれば次のようになるか。このような可想的原因を想定することにより、単に系列を完結させるばかりか、経験の領域

においてある事柄——ここでは人間の行為の自由——がよりよく説明されうるということにある。逆にいえば、理論的にある経験をよりよく説明する事象があるならば、またその可想的原因の想定が経験に反しない限り、系列の外に可想的根拠（ここでは可想的原因）を設定することが許されるというわけである。この関連をさらに詳しくみてみよう。

生起するものに関してこの原因性の系列は次のことを意味する。ある結果には必ず原因があり、その原因にはさらに原因がある……というようにそれは自然必然の法則が支配する領域である。それはそのような原因性によって、網の目のように張りめぐらされた現象界である。とするならば一体人間の自発的な行為の自由はどのように考えたらいいのだろうか。決定論者が主張するように私たちには自由はないのであろうか。私たちの行為を含め、すべてが自然必然的に決定されているとするならば、善悪を判定する根拠は全くないことになるだろう。カントはそこで自然と自由との両者が同時に成立するかどうかを考えた。すなわち自然と自由の両者が同一の出来事にさいして、異なる関連ではあるが同時に生じえないかとの問題を提出（B 564）した。そして可想的原因を考えることにより、人間の自由な意志決定の根拠を考え、アンチノミーの解決もはかろうとしたのである。ある状態を自分自身から始める能力としての可想的原因とはまさにそこから原因性の系列がはじまる、自由に従った原因性なのである。カントは可想的原因を十分に想定しうる一つの傍証として、人間の行為の自由の具体例を示し、補強する。それを手短かに述べればこうである。ある人の悪意ある嘘によって社会にある種の混乱が生じたとする。そのときその混乱の責任はその嘘をついた人に帰せられる。これはなぜか。なるほど彼が嘘をつくにいたった種々の原因が求められる。悪い教育、悪い付き合い仲間、彼の気質の悪さ、軽はずみと分別のなさなど。そのような諸条件によって悪行の原因が考えられる。しかし結局は嘘をつくにいたったそのような外的な諸原因は無視される。彼は嘘をついたが、嘘をつかないこともできたとして非難される。これは何を意味するのか。カントの考えはこうである。嘘をつくこともできたし嘘をつかないこともできたところの原因性が存在すること、それは上記のような外的な原因性によらないものであるのだから、諸原因（悪い教育、悪い仲間など）の系列からは自由であること、つまり経験の出来事の系列の外にある原因性と考えられるということである。いい換えれば、経験の出来事の系列の外に少くとも行為の選択が可能な領域が存在することを意味する。この領域こそ可想的なものが存在する領域なのである。とすると一般的に、自由な人間の行為とは何か。次のように考えられる。行為の選択が自由であるというこの原因性を理性の働きであるとするならば、人間の行為とは、その原因が可想界にあり、その行為の結果は現象界（経験の世界）にあるということになる。従って原因は経験の領域にはなく、その原因の結果だけが突如として経験のうちに現われる。そして後続の系列を形成する。理性の原因はその意味でその後続する系列の始まりである。嘘をつく原因は理性にあるが、その後続の結果（社会の混乱）は経験に現われるわけである。カントはこのように人間の行為を説明することによって、経験にあらわれる事象をそこなうことなく、逆に可想的な原因を想定することにより、うまく説明できたと考えたのである。しかし私たちはこの可想的原因、一般的には可想的根拠をどのようなものと理解したらいいので

あろうか。私たちはそれを第三節でさらに追求しよう。とりあえず、このアンチノミーの解決においてカントが示したのは統制的原理によって系列の外に可想的なものを想定したこと、しかしその可想的なものは経験から類推されたものである以上、その客観性は保証されないということである。統制的原理によって得られた可想的なものは本来思考されるものではあっても、経験的な概念によって規定できないからである。第三アンチノミーの解決による結論はこうである。定立は可想界を考えれば真、反定立も現象界に限れば真、従って定立、反定立いずれも真なる命題となる。

第四アンチノミーの定立は「世界に属するのは世界の部分として、あるいは世界の原因としての、ある端的な必然的な存在者がある」。反定立は「世界のうちにも世界の外にも、世界の原因としての端的に必然的な存在者はどこにも存在しない」である。第三アンチノミーの解決と同様、定立は可想界を考えれば真、反定立は現象界に限界すれば真で、いずれも真なる命題となる。その基本的な解決の論拠も全く同じである。系列の外にやはり可想的なものを考える。その点で形式的には変わらないが、その系列の意味と可想的なものの内容が異っている。まず第四アンチノミーでの可想的なものは、「必然的な存在者」とか、「実体それ自身の無条件的な現存者」、あらゆる変化するものの最高の条件としての「現存在」(B 587)であり、または「超世界的存在者」*ens extramundatum* (B 589)である。ここでは一応「必然的な存在者」(あるいは「第一存在者」)の表現で代表させておこう。この可想的な根拠としての「必然的な存在者」(第一存在者)は第三アンチノミーの可想的なものとは次の点で根本的に異なる。第三アンチノミーの可想的なものは「原因」であり、それは単なる働き(機能)でしかなかったのに、第四アンチノミーでは存在者だからである。系列にも同様なことがいえる。ここでの系列は実体そのものの偶然的な現存在の依存関係の系列である。単なる事象としての因果関係ではない。すなわち事柄のある変化(第三アンチノミーでは、系列におけるある項の単なる変化でしかない)ではなく、諸実体の生成あるいは消滅にそのものにかかわる変化の系列である。従ってこの「必然的な存在者」(第一存在者)は単なる変化の一つの系列の始まりなのではなく、すべての存在の生成・消滅にかかわる依存性の全系列にかかわる始まりなのである。そしてこの存在者はすでに述べたように、経験の世界から切り離されて、世界の外にある。すなわち全系列の外に存在するのである。

以上、アンチノミーの解決における統制的原理を示した。要約すれば次のようになるだろうか。第一アンチノミーの「世界全体」に関して、時空的に不定の背進がおこなわれること、そしてこの不定の背進によって実際は、世界全体の概念がつくられること。この背進は不定である限り、有限とも無限ともいえないということ、ここにおける統制的原理はこの背進をどこまでも必要に応じて継続する原理としてあらわれている。第二アンチノミーは「合成された実体」の分割に関する。その分割は不定の分割によるかぎり、単純な諸部分から成り立っているともいえないし、规定的に無限の部分から成り立っているともいえない。ここでの統制的原理はどこまでも分割をつづけることを命ずる原理としてあらわれている。第三、第四アンチノミーにおける統制的原理は基本的に第一、第二アンチノミーの統制的原理とは異なる。背進を続行しつづけるのではなく、

あるところで背進を中止することを承認する。逆に、その背進の系列がそこから始まることを指示する統制的原理としてあらわれる。第三、第四アンチノミーの統制的原理の適用によって、その始まりとは前者が原因性の系列の始まりとしての第一原因であり、後者は依存関係における始まりとしての第一存在者、との相違はあるのだが。ではこれらアンチノミーの解決における統制的原理と「付録」において示された統制的原理との関連はどうなるのか。カント自身は全くこの関連づけを必要としないかのように、そのことに言及していない。

私たちは次のように結論しよう。第三、第四アンチノミーの統制的原理は「虚焦点の原理」、第一アンチノミーの統制的原理は同質性の原理、第二は特殊化の原理ということによって、ある程度説明できそうであると。なぜなら第三、第四の統制的原理はある理念の設定によって、系列の統一を形成するが、その理念そのものは系列の外にあり、その実在性をけして主張するものではないからである。第一アンチノミーの統制的原理は外延的に系列が加算されるためには、その基礎に同質性が前提されていなければならない。つまり系列の背進が進行しうる前提として同質性が要求される。種と類との関連において同質性の原理をみるならば、そこでは常に同質なるものの発見を通して、種から類そしてさらに属へと進行することになる。とするならば、第一アンチノミーの統制的原理はまさしく「同質性の原理」の適用によるものということになる。第二アンチノミーの統制的原理が特殊化の原理であることも同様の論法で説明できる。単なる空間の分割でなく、もともとはある合成された実体の諸部分への分割である以上、その分割は諸部分の差異が前提されている。特殊化の原理も属から類、類から種、さらに下位の種へと進行することができるのは、差異の発見によって可能となるのである。その意味で、第二アンチノミーの統制的原理は「特殊化の原理」そのものであるといえるからである。

とするならば、第三、第四アンチノミーの統制的原理は連続性の原理といえるのではないかの予想がつく。事実カントは三つの統制的原理だけを「付録」では明確に示しているからである。しかし第三、第四アンチノミーの統制的原理＝連続性の原理とすることは多少の無理はあるかもしれない。それは次のように考えた場合に生ずる。なるほど連続性の原理は、特殊化の原理と同質性の原理が遂行されたのち、それらに連続的で統一的な関連を与えるのが本来の目的である。それはその統一的な関連づけのために、ある始まりを設定し、それを保証する原理とは見られないと考えられた場合である。ある始まりを想定することを保証する原理はまさしく「虚焦点の原理」であった。いいかえれば連続性の原理が「形式間に連続がある」ということ、そのような連続性のみに力点がおかれるならば、それは虚焦点の原理とはならない。だが次のように考えれば、第三、第四アンチノミーの統制的原理（＝「虚焦点の原理」）はほぼ連続性の原理と考えることができる。つまり連続性を与えるためにはある始まりを想定することが必須であること、従って連続性の原理はある始まりを設定することを保証する原理なのだとみなしたときである。私自身迷うところなのだが、ここでは一応次のようにいっておこう。第三、第四アンチノミーの統制的原理（それは「虚焦点の原理」でもあるが）ほぼ連続性の原理とみなしていいだろう、少なくともそれに帰着させることはできる。とするならば、四つのアンチノミーの統制的原理は、三つの統

制的原理にまとめられることになる。しかし「虚焦点の原理」という名称そのものは、のちの議論でなお必要とするため保存しておきたい。というのは、この原理が連続性の原理に帰着するかどうかとの議論とは別に、始まりを想定することを保証する原理という、顕著な性質をもっていること、そしてのちの議論においてこの特性を強調したいからである。

§3 統制的原理の客観性

アンチノミーの解決での統制的原理と「付録」における統制的原理において、もっとも大きく違い違ったのは客観性に関する問題である。第三、第四アンチノミーによってえられた始まり（第一原因及び第一存在者）は、可想的なものとしてそれらに対してなんの客観性も保証しなかった。「付録」ではそれに対して若干の客観性を承認（B 692, B 693）しよう^④とし、そのために「類似体」ein Analogon（B 693）の概念を導入し、説明しようとしていることである。そして統制的原理が内在的に使用されるかぎり、その客観性が保証されうるとしたことである。以下その問題を中心に論究していこう。

すでに第一節で統制的原理が超越論的原理を前提していること、客観自体がそのようなあり方をしていることをア・プリオリに前提していることを説明した。しかし統制的原理が体系的統一をなす原理として提示される以前に、カントには次のような問題意識があった。どのようにしてこのような体系的統一が行われるかという根拠に関して（B 676）である。カントはあらゆる場合を想定するが、帰するところ次の二点である。

- (1) 諸対象の性質がそれ自体体系的統一へと規定されているのかどうか。
- (2) 諸対象をこのようなものとして認識する悟性の本性が、それ自体体系的統一へと規定されているのかどうか。

(1)は客観存在が体系的統一の根拠かどうかということ、簡単にいえば客観存在そのものが体系的統一をなさしめるような仕方、もともと存在するとする考え方。(2)は逆に、客観存在の仕方とは別に、諸対象を整理する私たちの認識の仕方のうちに、体系的統一の根拠があるとみる考え方である。統制的原理は超越論的論理を前提するという考え方は、それらの問題に対する一つのカントの答えであった。すなわち(1)にも(2)にも単純に賛成できないとする立場である。(1)は自然の仕組みが体系的統一をもつということになる。しかしそれは何を根拠に主張されうることであろうか。自然が、それも自然全体がそれ自体調和ある統一体であるということを私たちはどうして知ることができるのか。私たちに与えられているのは、せいぜい自然の一部が知られているとみたほうがいい。とすると自然全体が体系的統一をなしているというのは、自然全体がことごとく私たちに知られたのちに主張されうることである。従って(1)は単純に主張することは許されない。(2)の場合はどうか。極端な場合、体系的統一は客観存在とは独立で、単に便宜的なものになってしまう。なるほど本質的に体系的統一は理性の働きであり、認識する私たちの側にそのような要求があることも一つの事実であろう。しかしそれだけであるとすれば、体系的統一は全く恣意的なものになってしまう。私たちにあって自然の仕組みが体系的統一をもつかどうかはわからぬ

にしても、部分的であれ体系的認識、たとえばニュートン力学のようなものが現実にあったこと、それは単に主観的認識にのみ根拠をもつものとはいえず、むしろ客観自体がそのようなあり方をしていると考えたほうが自然であるとみたのであろう。とすれば体系的統一に関してカントの考え方は明らかである。自然の仕組みが体系的統一をもつ調和ある存在かどうかはわからぬにしても、私たちが統制的原理によって体系的統一を求めるとき、私たちはそうであることを前提しているということである。この前提はけして経験によって得られたものではない。なぜなら自然の仕組みが全体として統一あるものかどうか、いまだ経験的に知られていないからである。とするとその前提は経験的に知られる前にそれを前提しているとの意味で、ア・プリオリな前提となる。統制的原理によって私たちが体系的統一を求めるとき、客観自体が全体として統一あるものとしてア・プリオリに前提され、その前提にたって統制的原理の適用が経験的になされる。そしてその体系的統一の理念に従って他の経験が明らかになればなるほど、逆にその体系的統一が確からしくなってくる、体系的統一とはそういった類のものである。このことがカントの説明したかったことなのである。とすると、その原理の適用によって得られたものの客観性はどうなるのか。たとえば第三アンチノミーで得られた可思的原因としての第一原因の客観性はどうなるのであろうか。

カントのアンチノミーの統制的原理での結論はこうである。この可思的原因はもともと経験をふまえて類推され、設定されたものにすぎない。それは原因性の系列を完結するものとして可思的原因を許容しはするが、その可思的原因そのものが客観的に存在すると主張されうるものではない。確かにその可思的原因の設定により、たとえば人間の自由な行為をうまく説明することはできた。だからといって基本的になおその客観性を主張することができるものではないというのがカントの考え方であった。第四アンチノミーの可思的存在者についても同様なことがいえる。ここで可思的なものと現象（経験）との関連を詳しく論ずることはできないが、可思的なものはただ経験を無視して設定されたものではなく、経験をふまえ、それとの延長において想定されたものであることは、ここで再び強調されなければならない。そして第三、第四アンチノミーの解決で想定された可思的なものは、あくまで現象あるいは経験の延長上にあるとはいえ、経験をふまえて類推されたものであり、そのような可思的なもの（第一原因でありまたは第一存在者）は経験の領域ではけして見い出されぬ性質のものであるのだから、その客観性は主張されえないとする。ところが「付録」では経験をふまえていること、その延長上にあるということに力点がおかれ、その限りで可思的なものは若干の客観性を保持していると主張するのである。そしてそのことをカントは自分の認識論上の概念によって説明する。それが「類似体」ein Analogonである。

ここでの説明は単純化され、やや形式的になるがお許しいただきたい。本質的に「類似体」の概念は感性、悟性、理性との関連による図式によって、説明される概念なのである。悟性は諸現象の多様なものを概念によって結びつけ経験的（悟性的）認識をもたらす。理性は多様なその経験的諸認識を素材として、体系的統一へともたらす。経験的認識をもたらす悟性は諸現象をもたらす感性の働きがあって成り立つ。それを欠くと内容のない概念だけが存在することになるか

らである。従って経験的認識にとって感性の働き（直観）なしには考えられない。だから経験的認識にとって本来、直観を欠く無規定的な悟性の働きはありえない。それに対して理性は本来的に無規定的なのである。というのは理性の目ざす体系的統一の理念である「完全さ」に対応する、なんら現実的なものは与えられていないからである。では理性が無規定的とはどういうことか。それは体系的統一を求める理性の働きにおいて、悟性がどの範囲まで概念を体系的に結びつけるかとの、その程度に関して、それ自体無規定的（B 692/693）ということである。類似体とは悟性と感性との関連を、理性と悟性との間にも認めようとする関係の類似より出てくる概念である。そして無規定的というこのことが類似体の基本的な性格となるのである。

悟性と感性との関連によって経験的認識が生じ、この経験的諸認識をふまえて理性統一がなされるならば、それは理性と悟性の図式によってある類似体を与えられうるし、また与えられなければならぬ（B 693）とカントはいう。またその類似体はある原理における分割と結合に関する最大限という理念である（B 693）ともいう。つまり類似体は最大限という理念であるが、実際には原理として示されることになる。これは何を意味するのか。ある類似体が悟性と感性との関連をふまえ理性と悟性との関連から引き出されたものである以上、次の二点がそこから基本的性格としてでてくることを意味する。まず第一は、分割と結合に関する最大限という理念が規定的な理念ではないこと。第二は、経験的諸認識をふまえているかぎり、その類似体は間接的に直観に対応する部分をもつということである。間接的であれ直観に対応するかぎり、ある種の客観性をもつといえるというのがその主旨である。以下この二点をさらに詳しく述べてみたい。

まず第一点の理念の無規定性に関していえばこうなる。その理念が原理として示されても、その本質にかならず未規定的なものを含むということである。今まで述べたアンチノミーの解決における統制的原理及びその原理と「付録」における関連づけを想起するならば、次のような要約できる。第一アンチノミーの統制的原理は同質性の原理であり、同質性の発見によってどこまで結合をおしすすめられるべきかは不定であること、第二アンチノミーの統制的原理は特殊化の原理であり、差異の発見によってどこまで分割をおしすすめるかも不定であること、また第三、第三アンチノミーの「始まり」をどこに設定すべきか、との範囲に関して「虚焦点の原理」は未規定的であること。これらが未規定的であるのはすべて理性と悟性の図式によって「ある類似体」としてしか示せなかったところに起因する。そもそも原理によって体系的統一への方向しか示せなかったことが、それを端的にものがたっているともいえる。ひらたくいえば、悟性と感性の働きによって具体的に経験的認識が形成されるのとは違って、理性と悟性の働きによっては体系的統一へ向うための原理を示すのが精いっぱいだというわけであろう。逆にいえば、自然全体に関して、ある規定的で具体的な体系的統一をけして示すことはできないということである。私たちはすでに三つの統制的原理が三つの理念（多様性、類似性、統一性）をもつことを示しておいた。今やこれらは類似体の理念を、より正確にいえば「ある原理における悟性認識の分割と結合に関する最大限という理念」die Idee des Maximum der Abteilung und der Vereinigung der Verstandeserkenntnis in einem Prinzip（B 693）に包括されることになる。しかしこの「最大限」という

理念は最大のもの *das Größte* や絶対的に完全なもの *das Absolutvollständige* といった規定的なものではない (B 693) ことはむろんである。だから私たちは原理を経験的に使用する場合には、それら理念にけして到達することなく、いわば漸近的に近似的に従うことになる (B 691)。

第二点の客観性に関してはどうか。統制的原理に若干の客観性を認めたのは、厳密に言えばその使用に関してなのである。第三、第四アンチノミーの統制的原理において得られた始まりは、可想的なものでありその客観性は保証されないものとして示された。それは始まりのもつ可想的なものの性格から直接由来するものであった。可想的なものはけして経験の世界に見い出されるものではない。それは経験をふまえてはいるが、その延長上に想定されたものである限り、その客観性は疑がわしいというのがその論拠であった。しかし一体可想的なものを想定することができるとする根拠は何であったのか。それはかなり危ない立場に立っていたのである。カントの主張はこうである。第三アンチノミーの原因と結果の系列に関し、私たちは諸結果を現象のうちにあるのを見る、そしてその諸結果の原因も現象のうちにあるのをみる。だからといって原因は必ず経験的でなければならないということになるのであろうか。逆にいえば現象にあらわれない原因が考えられる余地もあるのではないか (B 572) という。諸結果が現象であるからといって、その原因は必ずすべて経験的でなければならないということが確証されないのであれば、経験がない原因性、つまり可想の原因を考える余地があるのではないかというわけである。そのような論拠でもって、いったん可想の原因が認められ、それによって人間の自由な行為をうまく説明することは、逆に可想の原因を考えることの正当性を保証することにもなる。それにもかかわらずカントはこの可想の原因の客観性に疑をもったのである。このことは何を意味するのであろうか。

可想の原因であれ、可想の存在者であれ、可想なものは私たちの経験の外に想定されたものである。原理によって可想なものが想定されたが、それを客観的に存在するわけにはいかない。その実在性は可想なものであるがゆえに主張されえないからである。可想なものは経験の領域の外に存在するものである以上、また経験的な概念によって規定することも許されない。ただそのようなものを想定することが許されるというだけなのである。ここに極端な場合には、可想なものは経験の領域の外にあるのだから、それについて語ることもできないのではないかと議論が生ずるかもしれぬ。しかしそれは違う。なにも語れないのではなく、類推によるものである以上、そのようなものを想定したり、あるいは思考の対象として「対象化する」ことは許されるのである。ここで「対象化する」とはもちろんその対象を客観化したり、実体化したりすることではない。その対象を時間、空間的に想定したり、経験的な概念によって規定することは確かにできないからである。その意味で可想なものはあくまで思考の対象として「対象化する」ことは許される、が客観化することはできないこと、これが統制的原理の適用の一般的原則といえる。とするとそこにはなんの客観性もないように見える。事実カントは「付録」のあるところで、統制的原理そのものは理性の諸格率 *Maximen der Vernunft* (B 694) であり、客観の性質からとられたものでなく理性の関心からとられたものであること、それがどんなに客観的諸原理にみえ

ようとも本質的に主観的諸原則である（B 694）としているのである。このことをもう少し追求してみよう。

特殊化の原理は差異を見出し分割をおしすすめる、他方同質性の原理は同質な点を見出し結合をおしすすめる。同じ統制的原理でありながら、どうして相反する原理が生ずるのか。それこそまさしくこれら諸原理が主観的原則にすぎず、格率であることの証拠なのである。カントはこの状況をこれら諸原理がカテゴリーのような構成的原理ではないこと、もし構成的原理ならば矛盾が生じることになる（B 694）として説明する。客観の性質に依存している構成的原理には矛盾があっても、それは主観的な理性の関心に由来するものとして許されるのである。このことは客観の存在そのものに矛盾を認めない立場をカントがとっていることを意味する。この相矛盾する理性の関心は相反する二つのタイプの思弁家との仕方でもあらわれる。カントの説明によると、一方は多様性により多くの関心をもち、他方は統一により多くの関心をもつ。彼らはいずれもその判断を客観的根拠に基づくと考えているが、カントにいわせるとその相違は理性の関心に基づく相違だという（B 694）。たとえばそれは次のような仕方であられる。人間に関して、一方の人々は特殊な、そして血統にもとづく国民性、または家族、種族などを想定する。他方の人々は、自然はこの点に関して全く同一の素質をつくったとし、あらゆる相違はただ外的な偶然性によるものとして説明する、といった具合である。このような事態がなぜ生ずるのか。カントはその対象が両者の見解に対してあまりにも深く隠されていること、客観の本性を洞察することができないことを理由としてあげる。このことは逆にいえば、客観の本性がふかく隠されていて、それを洞察できないような場合に、相反する理性の関心が現われることになる。そして連続性の原理に関していえば、この相反する両原理をふまえてその上に統一を与える原理であるので、それ自体としては相反する原理をもたないということになるのであろう。とにかく統制的原理が基本的に主観的原則であるならば、客観とのかかわりはどういうことになるのかが、ここで再び問題になる。なるほど統制的原理は客観をア・プリオリに前提するものであった。しかしそれはただそれだけのものなのだろうか。また「ある類似体」の概念が若干の客観性を保証すること、それも原理の使用に関してであることはすでに述べた。これらのことはどういう意味なのだろうか。

結論を急ごう。統制的原理は本質的にそれ自身主観的原則である。だからこそ相矛盾する原理が併存しうる。他方統制的原理はア・プリオリに客観を前提する。そうでなければ原理の適用において客観に命令することはできないからである。なるほど統制的原理の適用によって体系的統一を求めても、それに対応するものが経験のうちにあるかどうかを確かめることはできない。ただいえることは、その体系的統一によってうまく説明されうるものがあればあるほど、その体系的統一はますます確からしいものになってくるということだけである。そういう仕方では客観にかかわりをもてない。これが統制的原理の客観との本質的なかかわりあい方で、ほとんど客観そのものにかかわりをもつカテゴリーのような構成的原理と根本的に異なる。構成的原理に関して超越論的演繹がなされ、統制的原理にはそれがなされえない理由もこれである。そして構成的原理よりは弱い仕方であれ、どうして統制的原理が客観と上記のようなかかわりをもつのかを、

理論的に説明しようとしたのがあの「類似体」の概念だったのである。この類似体の概念によって、間接的であれ、理性が感性の働きとも結びつき、具体的なものと関わりをもつこと、そのことによって若干の客観性とその分だけ満たされることが理論的に示されたわけである。このことはまた次のことを意味する。統制的原理を使用する側面からいえば、現実的な経験的諸認識を踏まえているならば、その延長上にどのような可想的なものも想定することが許されること、また分割も結合も許される。一般的にいえば経験に矛盾しないかぎり、可想的なものの想定及び分割も結合もいいということになる。このように経験をふまえてその延長上に統制的原理を使用することをカントは統制的原理の内在的使用^⑤とし、内在的使用である限りそれは若干の客観性を主張しようとしたのである。「付録」においてはじめて、それが内在的使用である限り、若干の客観性をもつことがここで示されたわけである。アンチノミーの解決においてはあまりにもその可想的なものの性質のみが強調されすぎた。それに対するカントの反省があったと思う。そうでなければ人間の行為の自由をはじめ、すべて可想的なものは理論上そのような想定が許されるというだけで、全く実体のない空虚なものになってしまうからである。「付録」で若干の客観性を保証しえたということは、なお可想的なものの性質がそのことを客観的に規定することはできないにしても、客観とのかかわりをより強くもつことを示していることになるだろう。そこには実践的にではなく、理論上において、人間の行為の自由をもっと客観性あるものとして主張しようとの意図が隠されていたのである。そしてそれこそ統制的原理に若干の客観性を認めることの意味だったのである。

〔付記〕

本稿は1988年1月16日三田哲学会主催の研究例会での発表をもとにまとめあげたものです。ここに発表のチャンスを与えてくださったことに感謝いたします。また貴重な助言をおよせくださった諸先生及び会員の方々に礼申しあげます。

〔注〕

- ① カント自身「付録」の中で (B 692)、次のように述べている。超越論的分析論の悟性の原則で、数学的諸原則と力学的諸原則に区分したこと、そして前者を konstitutiv な原理、後者を regulativ な原理として特色づけた。しかしこれらは経験に関していずれも構成的原理であること、本来の意味での統制的原理は純粹理性の諸原理に関してのみいわれるということである。
- ② 筆者が統制的原理を中心に言及した個々の論文は次のとおりである。
 「カントの第一、第二アンチノミー」鹿児島県立短期大学紀要 第29号 (1978)
 「カントの第三アンチノミー」同大学紀要 第34号 (1983)
 「カントの第四アンチノミー」同大学紀要 第35号 (1984)
 「カントの理性の統制的使用について」同大学人文学会論集 「人文」第3号 (1979)
 「カントの第三批判『序論』における目的論的判断力と美感的判断力」同大学人文学会論集 「人文」第5号 (1981)
 またアンチノミーの統制的原理だけをまとめたものに次のものがある。
 「アンチノミーにおける統制的原理」理想 (1987年夏 第635号)
- ③ H・Heimsoeth: Transzendente Dialektik S. 561 ハイムゼートは今日の読者には容易に理解しにくい原典部分

細谷：カントの統制的原理の使用について

であるとしながら、これは古典的な四元素説にまでさかのぼって考えられるとしている。もしそうだとすると、純粋なものとは地水火風の四元素で、他のすべてのものはそれらの混合体として、確かに一つの序列ができることになる。しかしこれはあまりにも古すぎる考え方に思える。

- ④ ここで「若干の客観性」との表現でまとめた。カント自身の用語は「……若干の客観的妥当性 einige objektive Giltigkeit を保証する」(B 692) とか「だから純粋理性の諸原則は……客観的実在性 objektive Realität をもつだろう」(B 693) という表現でいわれている。
- ⑤ 内在的 immanent という語そのものの説明は B 671 でなされている。

(昭和63年 9 月14日受理)